

国立大学機器・分析センター会議の発足について

分析センター

恒次 丈介

佐藤 勝

長い間話題には上っていましたが、今まで実現しなかった「国立大学機器・分析センター会議」の第1回会議が平成9年9月30日に、東京で開催されました。3幹事校（筑波大学、千葉大学、埼玉大学）の協力の成果の賜ですが、埼玉大学はこの会議で名誉ある当番校を務めさせていただき、盛会のうちに閉会することができました。

埼玉大学の分析センターは、昭和55年に全国で3番目に設置され既に17年を経た歴史の古い分析センターです。しかも、共同利用センターとして全学的によく理解されていること、予約システムが完備して共同利用センターとして効率よく運営されていること、最新の分析機器が比較的良好に整備されていること等から、他大学から施設見学に訪れることが多々ありました。そのような際に、茶のみ話にお互いにセンターが抱えるいろいろな問題を話題にしましたが、その折りに、センターの全国組織がありその会議でそれらの問題の解決について皆で議論できれば素晴らしいことだという話が、しばしばでました。それぞれのセンターが抱えている問題は様々ですが、今のようにそれぞれのセンターが自己完結的に問題を解決しようとしてもなかなか思うようにはいかないのが現実です。少なくとも情報交換の場があり、知恵を出し合う場があれば、センターを預かるスタッフとしては精神的支えにもなると思われます。茶のみ話の話題にしておくだけの問題ではないと感じた筆者の一人（佐藤）が、分析センターの設立・No.1とNo.2である筑波大学分析センターの専任講師の横山幸弘先生と千葉大学分析センターの専任助教授山口健太郎先生を訪ね、何とか分析センターの全国組織を立ち上げられないかを打診したところ両先生とも大変よいことなので是非実現したいと賛同していただきました。そこで、両センターとの了解のもとに設立趣意書らしきものを作成し、全国のセンターに全国組織の立ち上げをどう考えるかを問うアンケート調査を実施してみました。河西敏雄センター長在任中のことです。その結果、圧倒的な賛成（95%）を得ました。これはやるしかないということになり、筑波大学、千葉大学、埼玉大学の3センターのスタッフが、分析センターの全国組織を立ち上げることにについて具体的に話し合うために東京のグランドヒル市ヶ谷に集まりました。平成8年7月30日のことです。

当日集まったのは、筑波大学からセンター長の菊地修教授、専任助教授の鹿島長次先生、千葉大学からセンター長の横山正孝教授、専任助教授の山口健太郎先生、それに埼玉大学からセンター長の恒次丈介教授、専任助教授の佐藤勝、それに久保正雄技官でした。埼玉大学・恒次の司会で2時間にわたる熱心な話し合いが行われ、その結果、全国の機器・分析センターの全国組織を立ち上げることを決定しました。第1回会議の開催場所は東京とし、開催時期としては、会議の設立の趣旨・目的・メリットなどを明確化する必要があるための時間が必要なこと、開催を急ぐ必要もないこと、センター長の交代もあることなどから、翌年の3月末を予定し、開催責任校としてしばらくの間3校の持ち回りとするなどを決めました。また、初代会長候補に筑波大学センター長の菊地修教授を押すこと、会議は全体会議形式で行うこと、会則を作成すること等も了承されました。

その後、設立趣意書（案）の内容を詰める作業や、会則（案）の作成や、会議の名称（案）の

策定などが、3センター間でFAXや電話を使って行われました。また、この間、筑波大学の研究協力課長が文部省に出向き、学術国際局研究機関課に設立趣意書と会則の案を提出し、センター会議の設立を準備していることを伝えていただきました。しかし、これまでにはないものを生み出すことは、考えていた以上に大変なことであり、しかも、筑波大学、千葉大学、埼玉大学の3分析センターだけでも、その性格がかなり異なっているのが実状であって、その間での合意を得ることは本当に大変なことでした。話し合いの中で、菊池先生の発案で、第1回会議を開く前に、各センターに機器・分析センターの全国組織を立ち上げるための予備会議を開催した方がよいということになり、平成9年3月に予備会議が開催されることになりました。菊池先生の指示で、その開催の事務的な諸作業は埼玉大学分析センターが務めることになり、年が明けてからその作業に追われました。開催会場は、前年の秋口に押さえてありましたが、全国のセンターへの参加の有無の問い合わせ、資料の作成、会議当日の式次第の作成など、初めての経験なので、本当に大変でした。他の同様な会議の実施要項などを参考にして、どうやら間に合わせることができました。この際に、久保技官と事務補佐の中村さんが獅子奮迅の働きをしてくれました。また、理学部事務長補佐の中口謙二さんにはいろいろと貴重なアドバイスをしてもらい、助かりました。

平成9年3月27日に東京お茶の水のガーデンパレスで開催された国立大学機器・分析センター会議（仮称）の予備会議には、全国32大学のうち29大学のセンターが参加しました。会議は、埼玉大学・恒次の司会で始まり、菊池筑波大学分析センター長を議長に選出しました。経過報告の後、議長から「国立大学機器・分析センター会議（仮称）設立趣意書（案）」に基づき趣旨説明があり、全員一致で設立を承認しました。そのあと、会議の名称、趣意書の内容、会則の内容について意見交換が行われましたが、議論百出でいずれの議題についても全員の下承が得られず、結論は第1回の会議に持ち越すことになりました。そして、最後に第1回会議を東京で本年9月に開催すること下承し、第1回会議の開催に向けて、会長に恒次埼玉大学分析センター長、副会長に上松千葉大学分析センター長を選出して閉幕しました。会議後開かれた懇親会でも活発な情報交換が行われました。この会議の議論を通じて、会議に参加したセンターは同じような名称にもかかわらず、その組織、性格、大学に置ける立場等がそれぞれ大きく異なることを再確認させられました。そのようなセンターを1つの名称で1つの組織として成立させていくのがどんなに大変なことかもよくわかりました。それゆえ、それぞれのセンターの独自性を生かした緩やかな組織体として運営してゆくしかないことを実感させられた1日でした。

半年先に、第1回会議を開催する大役を仰せつかった埼玉大学としては、直ちに行動を開始する必要に迫られました。まず会場を確保することから始めましたが、最初予定した会場（借り上げ費用が安かった）はタッチの差で予約することができず、結局予備会議と同じ会場を使うことになりました。予備会議で持ち越した案件に関して開催幹事校で検討するための資料を集めるために再度アンケート調査を行うことにして、その発送と集計にも時間をとられました。アンケート結果の出そろった段階で、開催幹事校の筑波大学、千葉大学、埼玉大学の3センターのスタッフが、東京のホテル東京に集まりました。筑波大学の菊地修教授が4月から学系長に選出されてセンター長をお辞めになった関係で、筑波大学からは新センター長の河島拓治教授が出席されました。第1回国立大学機器・分析センター会議（仮称）の議事進行については第1部と第2部に分け、第1部で持ち越した諸案件を処理し、第2部で本格的な議論をしようという案が下承されました。会議の名称、趣意書、会則については、予備会議に提出された原案をもとにアンケート調査の結果を加味して議論を重ね、これらの問題についての幹事会としての原案を作成しました。さらに、第2部の議題については、埼玉大学で用意した議題では少し具体的すぎるとい

うことになり、意見交換の上、「機器・分析センターのあり方について」という一般的な議題に落ちつきました。また、議題について議論するには足がかりとなる資料があった方がよいのではないかということになり、3度目となるアンケート調査を行うことが了承されました。第2回会議以降の当番校については、第2回は千葉大学が、第3回は筑波大学が会長を引き受けることも了承されました。

このようにして、第1回国立大学機器・分析センター会議（仮称）開催の準備が次第に整っていきましたが、折角全国の国立大学の機器・分析センターが一堂に会する会議なので、なんとしても文部省から来賓をお呼びしたいということも、幹事会の一致した意向でした。埼玉大学としても何とかしたいということで、恒次センター長が塩原敏男理学部事務長を通して本部の門岡裕一庶務課長にお願いして文部省に行ってもらいました。交渉はなかなかスムーズには進まず心配しましたが、結局、恒次埼玉大学センター長と上松千葉大学センター長が揃って文部省に出向き説明をしたりして、最終的に文部省からの来賓の出席をとりつけたのは会議の始まる直前でした。この件につきましては、理学部事務長の塩原さんと本部の門岡さんには大変お骨折りをいただきました。アンケート調査の集計、会議資料の収集、案内状の作成・発送と、夏休み後半はこれらの事務処理でセンター事務室はゆっくり夏休みを楽しむことができませんでした。久保技官、中村さん、ごくろうさまでした。いろいろと大変なこともありましたが、平成9年9月30日に、第1回国立大学機器・分析センター会議（仮称）がお茶の水のガーデンパレスで無事開催されました。

第1回会議は幹事校の埼玉大学の恒次センター長の司会で始まり、第1部で名称を「国立大学機器・分析センター会議」とすること、設立趣意書および会則を幹事会原案通り承認して正式に国立大学機器・分析センター会議が発足しました。第2部では、文部省からの来賓として学術国際局研究機関課木下眞課長補佐と角田賢次研究所第2係長を迎え、本会議を行い、木下眞課長補佐から国の施策に関する一般的な説明を受け、さらに両氏を交えて機器・分析センターのあり方について活発な意見交換を行いました。懇親会でも各センターの実状などいろいろな情報が聞けて有意義でした。今回の会議では特にセンターに内在する問題に関する具体的な結論はでませんでしたが、皆が一堂に会して意見交換を行ったことに最大の意義があるのではないかと考えています。

第1回「国立大学機器・分析センター会議」がよちよち歩きながらも発足したことは、関係各位のご協力とご支援の賜であり、心から感謝する次第です。と同時に、この会議の立ち上げから関与したものとしては、その発足を本当に喜んでいるところでもあります。この会議が、今後定期的に関われ、機器・分析センターの発展に寄与できることを心から念願するものです。最後に、第1回会議で採択された「国立大学機器・分析センター会議設立趣意書」を添付させていただきます。

国立大学機器・分析センター会議 設立趣意書

国立大学及び国立研究所に設置された機器分析に関わる共同利用施設等は、昭和51年に筑波大学に最初の分析センターが設置されて以来、現在全国で30余となり、毎年2、3の施設が増えています。これらの施設では各大学内の大型分析機器を集中管理し、全学共同利用等により効率的な運用を行っています。設立時期、大学内での組織・運営などの事情が異なるため、各センターが抱える問題点は異なると思われます。それでも、分析機器の管理と活用によって研究活動を支援する役割は共通しております。そこで機器分析に関する共同利用施設間での意思の疎通をはかり、内在する諸問題を討議する全国的な連絡組織を持つことは有意義であると思われます。

平成8年7月に策定された科学技術基本計画において、今後の科学技術に対する具体的提案がなされました。研究開発推進の基本的方向として、社会的・経済的ニーズに対応した独創的・革新的技術の創成に資する研究開発を強力に推進すること、また、物質の根源、生命現象の解明など、自然と人間に対する理解を深める基礎研究を積極的に推進すること、が挙げられております。同時にこれらの研究開発を推進し、科学技術の発展に貢献するため、施設・設備等の研究開発基盤を抜本的に整備し、分析機器等は全学共同利用等により効率的に使用するよう提言されています。

機器・分析センターは、これまでも学内共同利用施設として教育・研究における重要な役割を担ってきましたが、このような科学技術基本計画に沿った研究開発に対して、積極的な役割を果たす必要があります。高い精度の機器測定の実施にはビッグサイエンスや新技術は生まれなないことを考えると、センターの研究支援はますます重要になっています。また、時代的な要請として、センターの役割に柔軟性を持たせることも必要になってきました。たとえば、分析センターの施設・設備を研究チームの活動の場として弾力的、流動的に使用することが考えられます。また、センター間を結ぶネットワークを整備することによりセンターの利用方法を刷新したり、施設を拡充することにより、ゆとりある研究支援環境を実現することも可能です。さらに外部に対するセンターの役割として、物質に関するデータの収集、保存、供給に関するデータバンク的な機能の充実を図り、また、地域の科学技術関連施設への支援などについても考える必要があります。このように、学内の研究支援センターとしての機能を充実させると同時に、機器・分析センターの教育・研究における役割について発展的に考えることも大切と思われます。

これらの問題は近い将来における機器・分析センターのあり方に関わる問題で、これを解決するためには全国的な規模の会議で討論し、英知を結集して解決の方策を見いだすことが必要です。また、この会議は科学技術基本計画に沿って研究推進を積極的に支援する方策を探るのに有効であると確信します。これにより、センターに現存する課題の多くは解決できると期待されます。

以上の観点を踏まえ、各大学等において機器・分析センターの役割を向上・充実させることを目的として、「国立大学機器・分析センター会議」を設立する。

平成9年9月30日

国立大学機器・分析センター会議